検査値を見て病態を診断 オンラインワークショップも開催！

大学院医歯薬学研究部 保健学域 准教授
山下 理子（やました みちこ）

臨床検査の8名の先生がオムニバス形式で行う臨床検査学入門。その中で山下先生が担当された「検査値解釈法」は「徳島赤十字病院方式検査値解釈実践」と題し、オンラインで行われました。

検査値解釈法は検査の値だけを見て病態を診断するというもの。推定される疾患をもれなく挙げて、次の検査の想定をしたり、医師だけでなく、いろいろな職種の人が意見を出し合うことができるので、瞬時に難しい判断を行わなくてはならない医療現場でも活用されています。

授業もテーマごとの班に分かれ、検査値を項目ごとに見ながら、お互いに意見を出しあい、検査値から病態を診断するトレーニングを行いました。

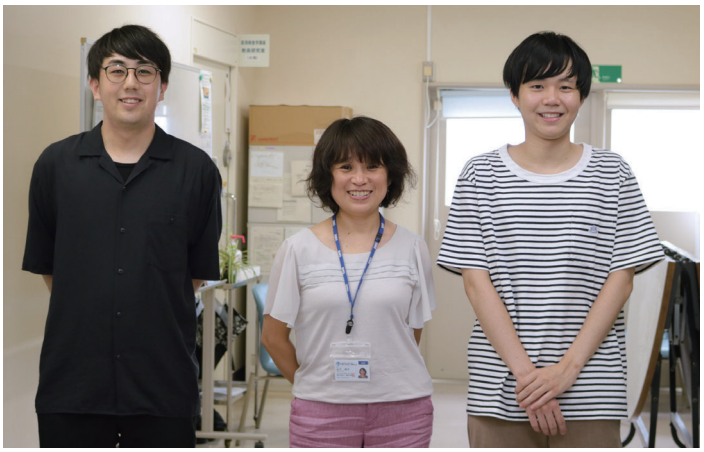
今回、授業に使った検査値は信州大学病院方式に山下先生が独自に血圧などのバイタルサインをプラスした「徳島赤十字病院方式」というもの。山下先生が徳島赤十字病院に在籍されていた頃に使われ始めたため、そう名付けられました。

これまでも検査値や臓器や顕微鏡の写真を見て、病理学的な診断を行うワークショップをおこなっていた山下先生。2016年、中四国の医学科の病理学教室から126名が参加し、開催された日本病理学会中国四国支部主催『病理 夏の学校 in 徳島』。山下先生が担当した教育型CPCでも検査値解釈法のワークショップを行い、好評を博しました。

その翌年は医学科、保健学科、初期研修医、検査技師などいろいろな人が参加できる『蔵本パソロジー勉強会』を開催。今年度も9月にオンラインで行い、今冬も対象を全学に広げて実施出来ないか、検討中ということです。

「将来的には検査値とバイタルサインを使って、種々の危険性を自動表示できる方向へ進むのではと考えています。スマートフォンの健康アプリ等も実用化されていますが、医療現場で本当に必要な道具はまだ無いように思います。

まずは、検査値とバイタルサイン解析を知り、有効性についてエビデンスを積み重ねることが大切だと考えています」。



取材時、卒論の相談に来ていた医学部保健学科 湯浅凌雅さん（左）、秦耕太さん（右）と。「僕たちの頃は検査値解釈法の授業がなかったので、羨ましいです」と話す2人。

第36回日本臨床栄養代謝学会学術集会で信州大学 本田孝行先生（信州大学病院方式考案）とRCPCのシンポジウム の様子。オンラインで発表する山下先生。

2017年に行われた蔵本パソロジー勉強会の様子（写真左）。その他のワークショップの資料も大切に保管されています。

医学科授業日程2,3コマ目に、オンラインワークショップ開催！

10月19日（火）8:30–12:00 医学科 病理学（I. II）特別講義
病院における病理医の仕事、CPC、RCPC

◎RCPCは現在、徳島赤十字病院で定期的に開催されています。職種や経験年数不問ですので、興味のある人はメールにてお問い合わせください。yamashitar@tokushima-u.ac.jp

※CPC（Clinico- Pathological Conference）臨床病理検討会。患者の診療あたる臨床医と病理医が症例検討を行う会。